海外の話題

2 つの決勝戦

農林中央金庫　ロンドン支店長　吉田　健司

2021 年 7 月 11 日午後、英国（ロンドン）では、2 つの大きな国際スポーツ大会の決勝戦が行われた。1 つ目はテニスのウィンブルドン男子シングルス決勝で、ジョコビッチ (セルビア) 対ベレッティーニ（イタリア）。2 つ目はサッカー EURO2020 決勝での地元イングランド対イタリア。いずれもコロナの影響で 2020 年の大会が延期されたものだった。2 つの大会の決勝にコマを進めたイタリアでの盛り上がりは相当なものだったことは想像に難くない。そしてイングランドも、本大会での決勝進出は初めてで、主要国際大会でも 1966 年のワールドカップ優勝以来の決勝ということで、朝からお祭り騒ぎで異様なほどの熱気に包まれた。

テレビでご覧になった方も多いと思うが、会場のウィンブルドンのセンターコート、そしてウェンブリースタジアムは収容数の制限は設けたが、見る限り、マスクをしていない観客でほぼ満席であった。英国ではまだソーシャルディスタンスが正式には取り払われていないのである。もちろん、入場者はコロナウィルスの陰性証明、ワクチン接種証明を義務付けられている。しかし、スタジアムの外や、街中の至る所にあるパブではビール片手に観戦する人が大勢集まり完全な「密」状態。屋内で飲食する場合、6 人までという規制は残っているのである。

英国ではコロナ感染の拡大により 2020 年 3 月来 3 回のロックダウンに追い込まれた。特に 2021 年 1 月からの 3 回目は真っ暗な冬の時期とも重なり精神的に相当辛いものだった。その解除は「Irreversible（不可逆的）」かつ「Date（日付）」ではなく「 Data（データ）」で行う、とされ相当慎重なアプローチがとられた。その間、驚異的なピッチでワクチン接種が進められ、ロックダウンが段階的に解除されていったが、最後の段階である 6 月 21 日からの「Stage4」は、デルタ変異株の感染拡大により 4 週間の延期措置が取られた。ワクチン接種もさらに進められたが感染は減るどころか急拡大の一途で、解除はさらに遠のいたか、と思われていた。しかし、政府は、決勝翌日の 7 月 12 日に、ロックダウンの全面解除を予定通り 7 月 19 日に行うと発表し、すべての制限・義務が取り払われる「自由の日」がとうとう訪れることになった。1 年半ぶりである。

ジョンソン首相は、「我々はウィルスと共存することを学び始めなくてはならない」と述べ、感染予防は法的義務から「個人責任」へと移した。そして 2 つの決勝を機に、ロックダウン全面解除という「大きな賭け」にでた英国政府。ちぐはぐさや矛盾だらけと批判されながらも、ジョンソン首相の、政治生命を背負ってでも決断は一気呵成に大胆に行う姿勢は、もはや爽快とさえ言える。一方で、決断を先延ばしにし、結局、（一部を除き）オリンピックを完全無観客とした日本国政府。2 つの国の措置は全く対照的となった。しかも圧倒的に英国での感

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

染者のほうが多い時期に、である。どちらが正しいかという議論はここでは避けるが、追ってデータや世論が証明してくれることになるだろう。

ウィンブルドンでの優勝インタビューで、「（この後行われる）サッカー決勝戦はどっちが勝つと思うか」と問われたジョコビッチはこう答えた。

「僕はただサッカーが大好きだから、純粋に楽しむよ」

イングランドがイタリアに PK 戦で惜敗した夜、この言葉だけが心に沁みた。

誰もが長くて辛いロックダウンだった。でも、これからの貴重な人生、純粋に楽しみたいと思っている。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます